

【京都府青少年育成協会会長奨励賞】

夢を追って生きる

南丹市立美山中学校 3年 中野 未唯

いつからか、私は夢を語らなくなりました。いいえ、語れなくなったと言ったほうが正直でしょうか…。子どもの頃は「お姫様になりたい。」等と無邪気に答えられたのに…。

夢に現実性を持たせなければならなくなった今、軽々しく夢を語ると、「どうしたらその夢は実現できるの？高校はどこに行くの？大学は？本当にやりたいことなの？」と矢継ぎ早々に質問が飛んで来ます。そう考えると、簡単に夢を口にすることはできません。

小学校の時は夢を聞かれることが多く、その度に悩んでいました。ちゃんとした夢を持っている友だちに、後れをとっている気もしていました。中学生になっても、将来については、あいまいにやり過ぎてきました。

でも、中学三年生の今、私は将来の目標を持てるようになりました。それは、「音楽の道を志す」という目標です。

幸せなことに、私は音楽に囲まれて育ちました。日常的に、ピアノを弾いたり、歌を歌ったりすることができました。その小さな頃から慣れ親しんだ音楽を「もっと深く学びたい、できれば将来、音楽に携わりながら生きたい。」と思うようになりました。このような目標を持つきっかけを与えてくれたのが、祖父でした。

祖父は几帳面で自分に厳しい人でした。三日坊主で終わってしまうことが多い私とは反対に、自分で決めたことは何年も何十年も続けて、最後までやり通すという意志の強い人でした。

実は、そんな祖父を、私はあまり好きになれませんでした。細かいことをいちいち注意してくるところやピアノの練習に口を出してくるところが嫌で、祖父のことを理解せず、その教えや影響を受けて生きていることに気付かないまま、よく反発していました。

ところが、去年の12月、あっという間のことでした。まず、家からいなくなり、しばらくすると病室からもいなくなった祖父。お見舞いに行く度に、みるみるやせ細っていく祖父を見てると、心が苦しくなります。そんな痛ましさに耐えきれず、病室の外で待つことも多くありました。何もしてあげられず、気持の整理も付かないまま、数日後、祖父は帰らぬ人となりました。家族みんなが大きな悲しみを感じました。

祖父の死後、たくさんの方がお参りに来てくださいました。来てくださった方々が、口々に「おじいさんにはあれを教えてもらった。」「これを教えてもらった」とおっしゃるのです。そのとき、「祖父はたくさんの人に大事なことを教えていたのだ、そして多くの人から感謝されていたのだ。」ということを知りました。一番祖父に教えてもらえる立場にいたのは私だったのに。「こんなに近くにいたのに、もっと聞いておけばよかった…。」

改めて祖父と過ごした日々を思い出し、ふと、祖父のおかげで、今の私があることに気付いたのです。そもそも、私が音楽に親しめたのは、祖父のおかげです。ピアノや歌に囲まれて育ち、音楽高校の声楽科を出て、大人になっても歌い続けた祖父の影響を受けて、自然と私は音楽に親しむようになったのです。

失って初めて気付いた「祖父のありがたさ」、後悔先に立たずという言葉が頭に浮かびましたが、祖父は私に「どう生きたらいいか。」ということや「人生の本当の意味」を考えるきっかけを残してくれました。私は、夢を持てずに不安に思っていました、夢とはふとしたきっかけや周囲の人の影響で持つこともあります。その夢に出会うのが早いのか、遅いのかの違いだけ…。

これからの私に大切なのは「決して夢をあきらめない。」ことです。祖父からももらった夢を追い続け、実現させること。それが祖父への感謝、恩返しだと思っています。私は今、自分の夢に向かって、かつて祖父が通った音楽の道へと歩み出そうとしています。